



「第二次日本経穴委員会」便り

～第35回 ツボ研究の方向性～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 さかぐちしゅんじ
坂口俊二

はじめに

現在、第二次日本経穴委員会では、国際標準化された361経穴部位を忠実にイラスト化する作業が佳境に入っている。前回の河原委員の経穴委員会便りからもその苦悩ぶりがうかがえる。

私も昨日（7月30日）、担当分の約50穴の最終チェックを終え、少しばかり重圧から解放された思いである。人はミスをするものというが、今回はミスできない非常に気を遣う作業だった。

さて、今回の経穴委員会便りでは、標準化の今後について考えてみたい。それは、形井委員長も本誌や関連学会誌で経穴部位決定後の課題としてあげているが、ツボ研究の方向性ともいべきものである。

今回のWHO経穴部位国際標準化の方法は、「文献学的研究」に基づいたものであった。それは、1960年代から始まっていた経穴名や部位の標準化検討の際に採用された標準化法の原則を踏襲し、2004年3月の北京会議で確認したものである。古典文献を踏まえる方法は、現時点では、最も部位の決定がなされやすいし、過去の研究成果の文献学的整理をスタート点とすることは、通常の研究手法と言えるであろう。もちろん、この方法も古典に示された内容を裏付ける実証研究を行う必要があるが、今回はその

検討は行っていない。

また、形態学的研究（ツボの形態学的研究と経絡の解剖学的研究を含めた）、機能的、臨床的研究を行う必要があるし、それらの方法で厳密に再検証して、今後さらに経穴部位を再検討する必要がある。

全日本鍼灸学会研究部経穴研究委員会の活動

現在、全日本鍼灸学会の研究部に経穴研究委員会（委員長：山田鑑照先生、他委員が5名）が組織されている。これは、『経穴集成』や『標準経穴学』をまとめ上げた（第一次）日本経穴委員会（委員長：木下晴都先生）が、その任を終え、活動の意志は全日本鍼灸学会に引き継がれた。1994年には森川和宥先生を委員長とし、頭部の取穴基準の実測による検証などを行い、学会にて報告した。その後、2000年に学会の組織再編に伴い、現在の体制となり、さらに研究部の方針により、2～3年で結論の出る経絡・経穴の研究を行うこととなった。

現時点では2つの研究を終え、さらに現在、第57回全日本鍼灸学会学術大会（京都）に向けて検討を始めている。私は第二次日本経穴委員会作業部会の一員であるとともに、全日本鍼灸学会研究部経穴研究委員会の一員でもあり、立

場は違えども同じ方向性を持って研究に臨むことは大切だと考え、両者のパイプ役を担っているつもりである。

それでは元に戻って、研究部経穴委員会のこれまでの研究成果を簡単に説明する。

一つは、2002年にまとめられた「経絡論争期の経絡・経穴についての基礎研究」(全日本鍼灸学会雑誌 52(5), 529-552)である。これは、経絡・経穴に関する文献収集を行いデータベース化することを目標に本委員会が作業に入ったが、その過程において、米山博久先生が投げかけた「経絡否定論」(1952年)の意義に注目し、2年余りにわたって展開された論争とさらに同時期に盛んに行われた経絡・経穴についての基礎研究に関する文献を収集整理・検討し、2002年の全日本鍼灸学会学術大会(つくば)のワークショップにおいて発表したもののまとめである。「経絡否定論とその反響」以外に、具体的には長濱善夫先生の針響による経絡の研究、石井陶伯先生の発生学よりみた経絡研究、藤田六朗先生の経絡経穴研究などの成果をまとめ、それに関連する文献226件のデータベースを発表した。

もう一つは、2006年にまとめられた「経絡・経穴の解剖学的並びに臨床的検討」(全日本鍼灸学会雑誌 56(1), 27-56)である。これは、経絡・経穴について3つのテーマに沿って6名の委員がまとめたものである。第1は「経絡・経穴の解剖学的検討」と題し、松岡憲二委員が「経絡と類似走行を示す解剖構造について」、山田鑑照委員長が「上肢経絡・経穴の肉眼解剖学的研究」を報告している。第2は「日中における刺鍼安全深度の研究」と題し、王財源委員が「中国における刺鍼安全深度の研究と進展状況」を、尾崎朋文委員が「経穴の刺鍼安全深度の研究を顧みて」を報告している。第3は「少数経穴の臨床効果の検討」と題し、私が「少数経穴

使用による鍼灸の臨床効果」について、森川和宥委員が「合谷一穴への各種鍼刺激が皮膚通電電流量に及ぼす影響」について報告している。

これらはいずれも、形井委員長がツボの研究方法として挙げた形態学的研究、機能的研究などの内容を包含するものである。さらに現在では、国内外とも鍼灸臨床研究については、変形性膝関節症のエビデンスを筆頭に頭痛などの研究を行い、明るい材料が多い。

研究成果の共有とツボ研究の方向性

来年度の全日本鍼灸学会でのワークショップに向けて今、研究部経穴委員会が取り組んでいるのは、WHO経穴部位国際標準化の成果を後押しできるものであると考え。概要のみを列記すると、大きなテーマは「日中における循経感伝現象の研究並びに股関節周囲経穴と臨床効果」で、2つの小項目が予定されている。

第1は、「日中における循経感伝現象についての研究」で、これには「中国における循経感伝現象の文献調査」、「良導絡からみる循経感伝現象」、「循経感伝現象の機序について」などである。第2は「股関節周囲経穴と臨床効果」で、これには「股関節周囲経穴の解剖学的部位」、「股関節周囲経穴の臨床効果」についての報告が予定されている。特に股関節周囲経穴とは、WHO経穴部位国際標準化において、2案併記となった環跳穴を意識しており、ご遺体を用いて肉眼解剖学的に詳細に検索するとともに、部位の歴史的推移や臨床効果について文献的な検討が加えられることになっている。

このように、粗い網目ではあるが、各研究分野が重なり合い、情報を共有すれば、数年後に検討されるであろうWHO経穴部位国際標準化の見直し会議では、実証研究の成果を加味した見直し盛り込まれる可能性は十分にあると考える。